

独立歩兵第二二九大隊、同第二二〇大隊、

同第二二一大隊、同第二二二大隊、旅団通信隊

○独立歩兵第十三旅団 司令部（直第八一四〇）

独立歩兵第二三九大隊、同第二四〇大隊、

同第二四一大隊、同第二四二大隊、旅団通信隊

○香港防衛隊 司令部（香第八一三八）

独立歩兵第六十七大隊、同第六十八大隊、

同第六十九大隊、香港防衛砲兵隊、香港憲兵隊、

独立山砲兵第五十一大隊、独立自動車第三十一大隊、

同第三十二大隊、同第三十三大隊、

○第二船舶輸送司令部（暁第二九四一）

船舶通信第二大隊、第六野戦船舶廠、

船舶工兵第二十九連隊、同第三十三連隊、

同第三十四連隊、

\* 独立混成第十九旅団（潮）略歴（第一三〇師団前身）

昭和十五年十二月五日、軍令陸甲第五十八号により

編成下令。

同年十二月二十五日、独立混成第十九旅団編成完了

昭和十四年六月二十二日、第一〇四師団主力部隊、

第一三二旅団により汕頭占領、六月二十四日、達

濠島、潮州占領

旅団はパイアス灣敵前上陸部隊と青島駐屯部隊により編成さる。

旅団長 初代 遠藤 春山少将

二代 松井 貫一少将

三代 中村次喜蔵少将

四代 近藤 新八少将

### 撃墜七十七機

香川県 井原 九八

大東亜戦争中の昭和十九年三月、現役兵として広島

西部四部隊に入営しました。私は農家の次男として育ちましたが、長兄は昭和十四年中支戦線で県城攻撃の際、一番乗りの偉勲を立て、名誉の戦死を遂げています。

私たちは関東軍戦車第一師団防空隊（部隊長・船曳義雄大佐）の部隊要員であった。

三月十二日屯営を後に、博多、釜山（朝鮮）、牡丹江（満州）と向かった。途中甘味品の支給があった。当時内地では余り口に入ったことのない甘味品であり、おいしかったことを思い出す。

鮮満国境を流れる豆満江を通過、牡丹江に到着した。大陸の街を初めて眺めた。街に漂う異臭が鼻を覆う、積雪の中を営門を潜る。

四月十一日、屯営を出発し、ハルビンに移動、さらに列車で満州の南下を続ける。車中同郷の同年兵である矢吹、西山、阿部君と一緒に、話題が弾む。途中列車は山海関を通過する。車中遥かに萬里の長城を望見することができた。支那河南省開封駅で下車、出発以来一週間の貨物列車の旅が終わる。

街は平穩で街角に露店が並び、棗、饅頭などが売られている。黄河流域で黄砂が強い風に舞い、視界は十メートル先も見えない。支給された防塵眼鏡が役立つのが分かった。この塵の中で中国の人々は平気で食物

を口に連んでいるのには驚いた。我々を迎えてくれた曹長殿の長い髭も黄砂にまみれ、ものものしい姿である。

部隊本部まで車両で到着、部隊長の訓示を受ける。

「君たちの先輩はつい先刻まで南岸の霸王城で戦っていた。君たちも先輩に負けぬよう立派に戦ってほしい」と述べられた。霸王城には中国軍で名声の高い湯恩泊將軍の率いる精銳が対峙していたのであった。戦車第一師団防空隊は部隊長・船曳大佐であり高射砲二個中隊、砲八門、機関砲四個中隊、砲二十四門の車両編成の部隊である。部隊の任務は戦車師団の防空援護であったが、作戦の末期、湘桂作戦に移行、軍の防空部隊として諸部隊の渡河地点、橋梁の通過援護に日夜の別なく行動を続けた。撃墜七十七機の偉勲は上聞に達した栄誉部隊であった。

河南作戦が始まって黄河南岸で黄河鉄橋防衛中隊を残し、さらに部隊の中から我が第六中隊は機動歩兵連隊と同行掩護を命ぜられ、部隊主力と別れて作戦に参加することになった。ここで同郷の矢吹君と別れた。

五月一日、昌平北方へ夜、行軍中、敵の強い反撃に遭遇、部隊は一時進撃を中止する。十九時三十分ごろから身辺に敵弾が集中してくる。ここまで来る間に白砂鎮で前田君戦死、中島君が竜門で戦死、運転手の渋谷君は下肢大腿骨切断の重傷、山脇伍長殿も大出血で戦死、喇叭手の竹内さんは膝蓋骨上部貫通銃創と死傷相次いで出る。

中隊は石仏窟で有名な竜門に向かったが、私たち五名は戦死者の火葬を命ぜられ残留し、茶毘に付し遺骨を胸に渡河し、本隊に合流するため竜門に向かった。

竜門から洛陽（河南）へ向かう道路上は、洛陽へ洛陽へと進撃する各部隊で混乱を極め、我々はこの渦の中から脱しようと考え道路上を外れ、友軍歩兵の散兵線をさらに前進しようとして出たとき、歩兵陣地から「五十メートル前方には敵が陣取っている、危ないから下がれ」と怒鳴られ、驚いて後退しようとしたとき、敵陣地から一斉射撃を受け、歩兵の掩護射撃のお陰で一命を拾った。臆を冷した一場面であった。

河南作戦は洛陽総反撃で一応終了し、敵將湯恩伯軍

は西安に退却、これを追撃して本隊は靈寶作戦へと移る。

この作戦間、歩兵に協力の命を受けた第六中隊（志水隊）は、靈寶に向かい追撃戦に移り、敵陣地の攻撃の際、歩兵は散開攻撃位置につき、われわれはその後方に布陣し、攻撃開始とともに、不意に現れた敵のトーチカから熾烈な射撃を受けたために、歩兵の突入一時頓座するかに見えた瞬間、我が機関砲は正確な集中撃を該トーチカに浴びせ、敵を遁走させ、我が歩兵突入成功の劇的な場面を展開した。

作戦開始以来、お互いに消息を絶っていた本隊がたまたまこの攻撃部隊の直後に進出していたので、この我が中隊の有効射撃を目撃していたのであった。お互いに感激の一時であった。私たちは洛陽攻撃後、中隊主力と別れ、黄河橋梁の対空援護のため黄河南岸へ引き返すこととなった。

私たちは入営以来一度も初年兵教育を受けたことなく、いきなり戦線に投入されたのであって、戦陣そのものが初年兵教育であった。この橋梁警備二十日の間

が私たちの初年兵教育であった。

私たちの中隊は九八式高射機関砲隊で二〇ミリ口径の砲を装備し、陸軍の中で最も新しい対空射撃の優秀砲を装備していた。

「射撃速度がいちじるしく早く、移動軽快、中空以下の敵機に対して迅速輕易に射撃を行うに適す」とこの砲の特性の暗証を繰り返して叩き込まれた。二〇ミリ口径二〇発弾倉、曳光弾使用、軽快回転自在、車載にて移動迅速などの特長を備えていた。

昭和十九年七月、竜門の黄河河畔を離れて湘桂作戦参加のため漢口に移動開始、部隊は車両編成で移動、漢口の偕行社屋上に中隊は布陣、集結部隊の対空掩護についた。

昭和十九年八月末、湘桂作戦に参加、漢口、長沙、衡陽、靈陵、全県、桂林、ついに柳州に到着、飛行場の警備に当たり、ここで昭和二十年の正月を迎える。ここに至る間は全く筆舌に尽くせない苦難の連続であった。

長沙に入る直前の黒石頭は九月二十五日到着、湘江

支流左岸に布陣していた中隊が昼食直後「爆音」、監視哨の叫び声、「定位置につけ」隊長号令、敵機発見、B 25爆撃機二機、P 51五機、P 38一機。まず爆撃機が急降下爆撃態勢に移る。その直前を隣接する第二中隊の高射砲が弾幕を浴びせる。間髪を入れずに我が第六中隊の機関砲がP 51の編隊を相手に一斉に火蓋を切る。六門の砲口からすさまじい勢いで火の帯が虹のように敵機目掛けて噴き上げられる。たちまち敵機の周りを包んでしまう。

P 51の群れはパッと散り、二〜三機は左に、三〜四機は反転、西方の山陰に遁走。B 25の放った爆弾は橋梁より五百メートルも離れた地点に落下、ドドドンと轟音すさまじく爆発、渡河地点はびくともしない、無事。

敵の反転攻撃を予期して待機中、予想どおりP 51一機が中隊めがけて突っ込んできた。「やるか」「やられるか」の一瞬、眼鏡手の頬を敵弾がえぐりとり、砲身や付近の砲手に赤い血潮を浴びせるが、眼鏡手はひるまず敵機を眼鏡で追い続ける。

敵機は遁走、後に彼は衛生隊に收容された。長い長い行軍の間こうした対空戦闘が毎日のように繰り返しながらの行軍であった。足の早い機関砲中隊は先行し、陣地を敷き、戦車部隊の通過かを掩護しながら前進した。

高射砲中隊は敵機の不意の急襲の都度、戦死者、重傷者を出すなど必死の追及行軍である。P 51に弾薬車を撃ち抜かれ火薬爆発の寸前、決死的消火で辛うじて爆発から免れたときもあった。山中にある桐の実があまりにも赤々と見事なので、それを食べて下痢をする者も出たり、連日の悪路運転で疲労の極に達した運転手がつい居眠り、トラックを横転させたり、重なる困苦との戦いの連続の行軍であった。

昭和二十年正月ごろから反転作戦に移行した。私たちは柳州北方二〇キロ地点の重要な橋梁の存在する脚板州の防空警備の任務で、ここに残留警備につく。この橋梁の確保が反転する友軍の死命を制する重要な任務であった。反転作戦は攻撃作戦と異なり、心理的に寂しい気持ちになりやすい常情であった。六月四日正

午ごろ、陣地内で昼食を食べ終わって休憩に入ったとき、青木小隊長は砂糖黍をおいしそうに嘔っておられた。突然、爆音が迫り敵機P 51四機が近接しつつあり、内二機が真上から急降下しつつ銃撃を加へながら接近、ダーダーは耳を劈く掃射を浴びせ近迫、杉浦分隊長は一番砲手井上上等兵の肩を叩きながら「撃て！」と命ぜられた。我が砲は反撃射を敵に浴びせる。敵機の銃弾の嵐は私の身辺を掠め、射弾は私の後方五メートルほどの場所で指揮を執っていた青木小隊長に集中した。左胸部左足先、大腿部顎骨など全身七弾を浴びて敵機を睨みながら即死散華であった。

この状況下、杉浦分隊長は「小隊の指揮は杉浦が執る」と大声で叫んで指揮交代。対空戦闘は数分にして終わった。橋梁は無事。小隊長の遺体を火葬に付し、私は屍衛兵として立哨し青木隊長の霊に仕えた。日ごろ優しい人柄で、兵の信頼を得、任務に忠実な幹候出身の隊長であった。

五日、六日と敵機の橋梁に対する反覆攻撃は繰り返された。まず敵機二機が偵察に先行し、次の二機が近

接降下、爆弾投下と手順を定め襲撃を繰り返す。我々防空隊の必死の反撃でその都度、橋梁確保の大任を果たすことができた。

終戦は脚板州を去った後に知ったが、武装は武昌まで続け、武昌で武装解除を受けた。九江付近の整山郷に集結、中国人部落に民宿のような抑留生活が始まった。

付近の中国人とも親しんだが、支給食糧は一日に一回に減食される始末。望月上等兵と共に中国人部落を回って餓磨ぎの内職をして、日本の餅のような「パー」をもらって歩いて、夕方持ち帰り、戦友と分け合い飢えをしのいだこともあった。いよいよ別れて日本に帰るとき「日本に来々、俺もまた中国へ来るよ」と別れた。

昭和十九年四月、北満の牡丹江を出発、廣西省の柳州に至る。中国大陸全土を一年半の月日で縦断し、主力部隊の掩護を任とし、終始一貫して陰の部隊として戦った私たちであった。

復員は昭和二十二年六月二十四日です。